源氏流生花書について

岩坪 健

はじめに

華道には様々な流派があり、その中の一つに源氏流がある。これは系譜の上で源氏の流れをくむ室町幕府の八代将軍足利義政（東山院慈照院）を祖と仰ぐ一派で、その活け方などを記した伝書の中には源氏物語と深く結びつかったものもある。この分野野の研究が進んでおらず、中野幸一氏の調査が現在のところ、唯一の文献である。本稿は中野氏が列挙された伝本に新資料をいくつか加えて概説したあと、学会未紹介の写本の影印・翻刻を掲載する次第である。

まず、源氏流の祖と言われる千葉龍トの著作を取り上げ、次に源氏物語の内容に関わるもののとり、それ以外に分けて一覧ずつ解説を付けることにする。また従来、源氏流は龍トの一派しかないと考えられていたが、実は同じ時期に他的人物が立てた別の源氏流があることも明らかにする。

一、千葉龍トと足利義政

龍トの著作のうち、明和三年（一七六五）に出版された『源氏活花記』と、同四年刊『活花百瓶図』に記された
源氏流の由来を要約すると、次のようになる。

康正二年（一四五四）、足利義政が六人の連縦（江戸芦浦寺、堀文阿弥、築紫米阿弥、京珠慶坊、徳大寺義
門、大江広末）に命じて『五十四帖の花論』を「極花伝抄」と定めて秘蔵したため、世間に流布しなかった。

それは『五十四帖の活方源流源秘の巻』、六種の図式活方であり、その『六種の秘事』のうち、「紅葉の器と花
器と花論の巻」を、珠慶坊から龍卜の先祖にあたる行胤が継承して、紅葉の賀の花

源氏流を人々に伝え、宝暦十二年に江戸に下り、浅草の茶店で花会を催し評判になり、当流は繁栄した。

その後、星箱を含むとなく去り、伝は家に残り、道を

元祖行胤、花を愛し東山公の流を源で活花の妙術を得た。その後、星箱を含むとなく去り、伝は家に残り、道を

とあり、断絶していた源氏の花論を復興し、自ら中興の祖と称しているからである。

この義政が定めた源氏の花論を復興したという触れ込みは、当初から疑いの目で見られ、明和三年（一七

六〇）に刊行された石歳可然著『花論評判当世壇のぞき』には、

源氏とは花の生方に六十帖ありやーと尋ねれば、いよいよふふにてはなし。野花の形、六十品ありと東山

殿の御時、此形ありが断絶したる事也。今、是を再興すは証人のなき物語成べし。其六十色の中、二つ三

つ見に、磁器には花ばりをこしらへ焼つけてあり。抽き業也。
として手厳しく批判しているので、源氏流の由来の信憑性は低いと言えよう。工藤常佐氏が、
千葉龍卜という、おそらく茶家のなげいれ花を身につけていたであろう人物が、江戸時代の中期に新しく流派を興そうとして、その創流の次第を足利義政に仮託したとみて間違いないだろう。
当時、もっとも古い歴史を誇る流派は、当然のことと代々六角堂頂法寺の執行を務めた池坊であった。立花を
専門としていた池坊に対して、茶の湯のなげいれ花を出目とした花師たちが、それぞれ一花の湯を離れていけば
なぜ龍卜は足利義政を持ち出したのか。それに関しても工藤氏は、次のように推測される。
一方、なぜ源氏の巻は六帖と流派の流派は源氏流と同じである。流派の資料Dの奥書を見るとき、
「花を製し六帖は前のことく義材に納めて極秘」というのは義材が生け花を断絶したため、後人が勝手に行こうとした花師たちが、それぞれ一花の湯を離れていけば
この義材は源流の花師と自らを比しながら、創流の流れをくむと主張できたからである。たとえば東山流の家元が記した奥書（第三
節の資料Dの奥書）を見るとき、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと主張できたからである。たとえば東山流の家元が記した奥書（第三
節の資料Dの奥書）を見るとき、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと主張できたからである。たとえば東山流の家元が記した奥書（第三
節の資料Dの奥書）を見るとき、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比しながら、創流の流れをくむと自らを比ながら
この奥書を記した得実斎とは東山流の二代め家元で、文政十年（一八二七）に六十歳で没した千葉万水である。

奥書の文中にある「家คว้า(358,103),(394,117)」、「故翁」は同一人物で、当流始祖の千葉一流（初代、得実斎）を指すと考えられる。

千葉一流には「小伝書者言」に記されている。「小伝書者言」は、この一節から、義政を祖と仰ぐのは、源氏流と東山流のどちらでもなく、多数あったことが知られる。

これは、義政の流れを汲むのは、我一人と自負している千葉龍一への痛烈な批判とも受け取れる。源氏流も、その大勢の一派にすぎぬと言いたいのであろう。

同じ事で、東山流の著「抛入花松精微」、「花道古書集成」五巻に収められた冒頭の文章によると、初代家伝に伝来した「東山公の伝書」を再興しようとしたのが、義政が亡くなり数百年もたち、真意が分からなくなってしまえと述べている。そこで先代は諸説を渋滞し選択選択して、ついに本意を会得し、ようやく伝書に復した。とある。という。

こうした状況の中、千葉龍一があえて「源氏五十四帖」にちなんだ花論をつくり上げ、それを自らの拝入花を承認、承認したことは、千葉龍一がこの花形の仮託を、その龍一の門下において著された「源氏插花時流趨抄」では五十四帖ではなく六十帖となっている。この変化は先学の指摘によれば歌舞伎の浄瑠璃本「源氏六十帖」の影響である。
では、ないかといわれる。当時江戸で上演された歌舞伎の『源氏物語』の帖数合わせたものとすれば、時勢へ
の見事な対応を示したものだといえるだろう。

源氏活花の名は源氏六十帖より出たりとある。また、湖月抄の首巻発端ににある『此物語の冊数』項にも

『天平六巻にぞらべ源氏六十帖ここでり』とある。これより既に中世において、六十帖と見る説が流布してい

さて、龍トウが始める源氏流は隆盛を極め、その編著者は短期間に次々に出版された。

①『源氏活花記』明和二年（二六五）刊。『花道古書集成』3所収。
②『花花百瓶図』安永四年刊。『花道古書集成』3所収。
③「花枝折抄」安永二年（二七三）刊。『花道古書集成』4所収。
④『百器图解』安永四年刊。散逸。江戸出版書目による。
⑤『花花百瓶図』天明六年（二七八）刊。『花道古書集成』4所収。
⑥『花道活花図』享和元年（二八〇）刊。

編著者は①②③が龍トウ、④は源氏流、⑤は源氏流、⑥は源氏流、⑦は源氏流、⑧は源氏流、⑨は源氏流、⑩は源氏流の記録である。

このように源氏流の著書は、十八世紀後半に集中して出版され、それ以後の刊行物は見当らない。また、いずれ
の書も、源氏物語に関わる具体的な記述は載せていない。たとえば『源氏活花記』を例にとると、『源氏花論六帖

のところ、源氏物語とはいえ、当時江戸で上演された歌舞伎の『源氏物語』の帖数合わせたものとすれば、時勢へ
深秘を示したうえで、六つの判名を示した（後述）。『表之巻』と題して「花数員の事」「花斗葉斗の事」など五十
四か条を列挙したりのように、源氏物語との関係は主に判名と巻数に限られ、物語の内容には触れていな。工藤
氏が、

龍トには伝統的な六角堂池坊に対抗して自らの流派の出目を飾る必要があり、大坂で名を挙げ法橋に任じられ

てはいたが、さらに新興都市である江戸において、自らの流派の声名を挙げるという目的があった。当時の他

の諸流が、その後表現を形式化させるのに比べ、『源氏五十四帖』を主題としてした花を考案し、流派名を源氏流

と述べられたように、源氏物語の撰取は源氏流の特色であるにもかかわらず、その記載は出版物には掲載されてい

ない。これは龍トが『源氏活花記』において、

源氏の花は別伝にして、桐壷・薊木を始め五十四瓶の活方、貴人へ奉る花ならば、印可免許にて知るべき。当時他

の判名を源氏流

として流派の奥義に扱い、そのため、

源氏全稿花法は堪能の人になくば授ける事かた。此書に著する処は、書院七所柱、其外、会席等の花形を初

心のために出す。源氏の巻々の花形は秘事たるが故に、一向、花形ともも鏡にも出さず、

（原文は総ルビ）

本節では龍トとその弟子、そして他流の著書の順に取り上げる。

A、『源氏流瓶花規範絵巻』には掲載されず、中野幸一氏の解説（注1の著書、四一六頁）を転載する。

B、『国書総目録』には掲載されず、中野幸一氏の解説（注1の著書、四一六頁）を転載する。
巻子本一巻。紙高十八センチの小巻。「桐壺」から「夢の浮橋」までの活花図の彩色絵巻。寛政・享和頃の写。ただし彩色図はどういうわけか「玉鬘」までの二十一図で「初音」以下は、

初音、二重筒上白梅、寒菊下寒菊、胡蝶、掛花、生たまに撫子、あじさい、亀甲、加満桜桜、

のようく巻名と活花の説明のみとなっている。奥書・譜説の類はない。二十一図のみではあるが着彩の源氏流

活花図として貴重である。

右記の文章のほか、「桐壺」若紫の巻の写真が掲載されている。

B、「源氏流極秘奥義抄」

『国書総目録』未掲載。中野氏の紹介によると（注1の著書、四一八頁）、巻子本二巻、千葉龍卜著、安政三年

（八五年）正隆号。序文によると、足利義政の奥義を千葉龍卜が伝えたとあり、全五十四帖にわたる巻ごとに用

いる花を場面に応じて指示しており、花の図はないらしい。中野氏が翻刻された桐壺の巻を以下、転載して、私に

句読点を付す。

桐壺

御伝は、桐壺といふ名に由来して桐を生するも、桐、鳳凰は、聖代ならでは出ぬ位あるもの也。御産の花、第

一の習とせり。祝儀にももちろべし。

黒樫曰、桐壺更衣小金の宣旨といふ事あり、小垢といふ處産あり。小垢といふ竹ookeあり。又、三位のるおおくらせ給ふ。是は桐

壺長く此世を去給ふ時の事也。仏花と心得へし。又、桐壺帝、母北の方に源氏若宮にてます時、観負命
婦を使として絵はりし歌、
みやきの霧吹むかふ風の音に小萩かかもとおもひこそやれ、
といふ時は必、萩を生る也。又、源氏、七の御年、御文始として御学文始あり。琴笛の音に雲井をひかすと
有。此時は必、松を生として生る也。松は琴に通ぶ。下処人。又、鴻臘館にて唐人、人相を見奉りて源の氏
を給はることあり。此時、花、白花にかきの如し。

文中の『御伝』は義政、『愚挙』は龍卜の説を示す。前掲資料Aでは一巻につき一つの生け方しか載せていないの
に対して、本書では同じ巻でも場面に応じて用いる花が異なり、おそらく活け方が違うと思われる。このほか、陶
が版本に掲載しなかった源氏物語の粗筋も分かり、源氏物語の受容史においても貴重な資料である。

東京大学総合図書館蔵『南菀文庫』あり。『国書総目録』に収められているが、いまの学会に紹介されたことはなく、

C、『源氏五拾四帖之巻』

本稿に全文の翻刻と影印を掲載した。寸法は縦一三、七センチ、横一九、八センチで、袋縫い。

本書は五十四帖のうち五巻を欠き、また巻の順でない部分が少々ある。問題の箇所を巻名と通し番号（1 桐壺）
54 見ふ縁）で示すと、欠巻は2 師木・7 紅葉賀・12 船摩・13 明石・50 東屋であり、配列がおかしいのは4 夕顔から
20 頰木までの間で、番号のみで示すと、48 56 11 9 10 17 18 15 16 14 20 19 の順で並んでいる。このように巻頭近く
推定される。
各巻の構成はみな同じで、次の通りである。

① 巻名
② 登場人物名（二人）
③ 和歌（一首）
④ 物語の粗筋
⑤ 生け花の図
⑥ 活け方の解説

本書では逢生・関屋、紅梅・竹川の順で、これら『源氏物語』と同じで、『源氏小鏡』とは逆である。②の登場人物は、桐壺の巻にしか現れない朝倉命婦が空蝉の巻に置かれるなど、不審な点が多い。

『藤原家の若葉下の巻』は登場人物が口ずさんだ古歌、残しはすべて物語で説まれた歌で、その多くは巻名を含むものである。

① 巻名
② 通じて活け方の心得や竹製の花器の説明などを箋条書きに記している。次いで源氏物語が全帖にわたり、

③ 竹の花入れの活け方と、その図。
歌に、いとけなき初詣になかがよぶちきる心はむすびつつや

始まり、以下、生け方の解説とその図を載せている。

夢浮橋の巻のあと、

右、仏五拾四は源氏六拾之内、五拾四にようて切る器なり。奥六帖は江州石山寺に納りて世に流布させらるよ

とあり、そのあと「附録」として十七冊の竹筒の花器が図示され、解説が付けられている。

花器草七十二、花器草八十、花器草八十八、花器草八十八

が、故花原先生の教えを元に作成して「花生源氏手引草」と題した、と記したものです。次に、『明治三十五年秋九月

中旬写之月嘯亭霞晴』という書写本書、最後に、文化十六年（一八四一）東山流二世得実齋の奥書があり（第一

節に全文引用）、それにより本書は源氏流ではなく東山流の著作と判断した。

E、『源氏流活花聞書』

本書は「相手へかき事」を始めとして、『切紙伝授箆条』『草木五十四品』などの項目を立て、それぞれ五十四ケ

条の教えを列挙している。その中で源氏物語に関係するものは、次の項である。

源氏五十四ケ条

冒頭に蔵書印『須佐笠松文庫』あり。国文学研究資料館にマイクロフィルムあり。
花実はそろなひり。

一、空蝉。 花にては、はたんなり。 花器にては、うすはた也。 活方は好みたるを、よしとす。 夏活には、ちるをよしとす。

二、卵形。 花にては、ほたんなり。 花器にては、燒物也。 鑄物也。 活方は、すそ葉なく上しきり涼しく活るなり。

三、花々。 花にては、しや花也。 花器にては、花ふんもん也。 活方にては、活方とし船夜会女中宿之時なり。

四、紅葉。 花にては、紅葉也。 花器にては、花ふんもん也。 活方にては、活方とし朝の席也。 尤、習ひ有り。

（揚名介也）という名称が書かれていることである。

以下、葉の巻からは葉名のみで解説はなく、夢浮橋の巻のあと、右は花の名、花器の活方習也の文章を締め括ってある。なお葉名で特異なものは、幻の巻が「幻夕」とあること、また紅梅と竹川の巻の間に、「ようめいノ助」

の御前にて焼ぜの花器に柳を活、又同じように春梅に樺を生す。尤より直下となる。

（内は割注）
また、作者が入門した師匠とは、千葉龍を推定される。というのは三月九日、龍が銀閣寺に参り義政像に
供花した日であり【注2、参照】、また同じ序文に、
委しの源氏花論の書【注3】、室町の将軍源義政公、
康正二年丙子初冬に六人之連衆に命じて五十帖の秘伝
を奉呈神文之事の項があり、その文章に「松翁斎法橋千葉龍を
先生」と称しているからである。また、本文中に
の門下生であると知られる。そこで本書の次の節が
「活花記」と同文であるのは、それを引用したからと考えら
れる。

源氏花論五十帖深秘

一衣木　一　紅葉賀
一　須　一　明石
一　雲　一　東

この六帖は、次の資料F.Gで問題にする。

F.　源氏六拾帖花器之図
　　国書館目録未掲載、写本、一冊、全八丁。東海大学桃園文庫蔵（桃一〇一八五）。

外題は「源氏六拾帖花器之図」、内題は「源氏六拾帖花器図」。原書には、
右之図、源氏活花之花器、行之形、当流之秘事など。故、門人之外、不許之。他者見外言、不可有之。
とあり、寛政六年（一七九四）に花雪庵蘭幸が書き出したものである。

序文は、以下の通りで、その内容は源氏流の由来と同じである。

源氏六十帖花論之書者、徳川二年丙子初冬、定め給ひ秘して安蔵に納置給ふる
へ、世間に知人無更。其後、花道堪能之者六人（江州芦浦寺、徳大寺義門、京
朱慶坊、筑世原朱阿弥、坂文阿弥、大江広末）、修行の一助を成す。

然りと寸法、今伝法というとも、深切、不見屈者には著て不能見。

六種の巻、其極秘にして別して大事成巻ゆへ、花器の僕に愛に記させ。何と寸法、口伝や。

これは資料Eに引かれた龍卜者「源氏活花記」の記述と一致するし、また本書の序文も源氏流の趣旨と同じで

あり。しかしながら、六帖のうち雲隠の位置が資料Eとは異なり、Eの雲隠は東屋の前で、その方が巻の順に合う

（この問題は後出の資料口で扱う）。またEが「千葉龍卜先生」と記したのに対して、本書には龍卜の名前は見られ

ない。
G、「源氏花論之書」

東海大学桃園文庫蔵（桃一〇一一九）<国書総目録＞未掲載。写本、一冊。江戸中期写。資料Fで問題にした六帖、すなわち龍トが「源氏活花記」において「源氏花論六帖深秘」と定めた六帖のうち、雲隠を東屋の前に置いたのとは逆に、資料Fでは東屋の後に雲隠がある。そこで資料Gの本文で問題の六帖を見るとき、雲隠以外の五帖は全て、花器と活け方を極秘に扱い説明を省いている。Gには雲隠の巻はない。代わりに幻の巻に、此巻、至大事の巻も活動心得、前巻と同じ。秘中の極秘也。此巻の心、謹て考、可知所也。至極秘にして雲かくれの伝と号し、花器の図示活形に極秘なり。さて資料Gの外題は題目に「源氏物語各巻秘説」とある。内題は「源氏花論之書」を書であるが、表紙から剥がれた前見返しの表側に書かれているので、後人の命名であるだろう。これから三つの巻名が
示す通り、内容は源氏物語の全帖にあたり、桐壌の巻から順に物語の粗筋と花の活け方を記したもので、生け花の
絵はない。参考までに桐壌の巻を全文引用し、適宜句読点を付し、また割注はヘー内に入れた。振り仮名は多
く付けられているが、特殊な読み以外は割愛した。

桐壌

源氏一の巻を桐壌といえるのは、大内に五壌あり。是を五壌といふ。一には桐壌〈角度〉、二には権壌〈照陽
壌〉、三には藤壌〈飛香壌〉、四には梅壌〈花壌〉、五には雷鳴壌〈襲芳壌〉、是なり。光源氏の母御息所
を、桐壌衣装といふ。更衣とは四位給女の名なり。御間御服を召かける時、按給ふ人なるれヘ更衣といふ也。

桐は諸木の王也。鳳凰も鳥の王なるへ。此木に宿り巢を喰。それは唐堀宛の御代となるしくも。延喜の帝〈六十
代、醍醐帝〉を賢王と賛す。依之、桐壌の御服を寵愛有って、皇子御誕生あり。是、二の宮也。一の宮は弘微殿御
服也。然るに二の

宮、いつくしき世にならひなきへ光明君とも光る公とも申。是、源氏の君也。

○当流に於ては唯、花器の名をよせたる斗なりといへとも、卷の次第によりて心得へし。花論、有之へに聊

○此巻、桐は諸木の王たるへ。鳳凰も宿る聖代の心、賞すへきの極に至れり。諸祝儀、婚礼式、最上りた。

概観すると、活け方が解説よりも巻の説明の方が長く、また梗概文は必ずしも物語の粗筋を忠実に語るわけではな
く、これらの特徴は他の巻にも当てはまる。ちなみに龍上の著書〈源氏流権秘奥義抄〉（資料B）と比較すると、

花は賞覧もなき詠うべき花は、遠慮有へし。蘭は殊に鳳眼の活形有用は、可活用。然し極伝の物へ亂に不可

用。
あるのに対して、Gの奥書には「当家、同流も、この書、無之ゆへ可秘々々」とあり、当流には他に類書がない。
（敬称）

昨晩、お二人のメールをいただきました。お忙しいごく中止のことをおっしゃりましたが、心よりお世話になっております。この度、お二人のコンサートに関するお話をさせていただきたく、お二人の意見を伺いたく思います。ご都合のいい時刻や場所があれば、お知らせください。心よりお待ちしております。

敬具

【ログイン情報】

<table>
<thead>
<tr>
<th>A</th>
<th>B</th>
<th>C</th>
<th>D</th>
<th>E</th>
<th>F</th>
<th>G</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>O</td>
<td>O</td>
<td>O</td>
<td>O</td>
<td>O</td>
<td>O</td>
<td>O</td>
</tr>
</tbody>
</table>

【ログイン情報】
の三点である。
1. 那野御流、花の源氏五十四帖（同明会、平成七年）
2. 『生花拾花春秋』（文英会、平成十年）
3. 『源氏物語花の五十四帖』（求龍堂、平成十三年）

生けは岡田広山（広山流三代目家元）、梗概文は原岡文士氏の合作。

源氏物語と華道の結びつきは、今や源氏流以外の流派でも試みられている。一方、源氏流は十九世紀に衰退したのち復興され、現代に、しばしば諸流一覧（大井ミノ氏編『いけばな辞典』所収、東京堂、昭和五年）に、さまざまな流派と並んで「源氏流近藤清峯」とある。ただし今でも源氏流において、源氏物語に合わせた五十四通りの生け方が存続するかは未確認である。

四、源氏物語の内容を掲載しない源氏流花書』では、伝本の成立または書写の順に列挙する。いずれも写本で伝わり、版本はない。

本書は自序によると、「一貫堂自顔のち、三貫堂自顔と改名」の著作で、寛政四年（一七九二）に成立した。一貫堂自顔の著作で、寛政四年（一七九二）に成立した。一貫堂自顔の著作で、寛政四年（一七九二）に成立した。
<table>
<thead>
<tr>
<th>올해의 시리즈 (군론)</th>
<th>2011년 (1)</th>
<th>2012년 (1)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2013년 (1)</td>
<td>2014년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2015년 (1)</td>
<td>2016년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2017년 (1)</td>
<td>2018년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2019년 (1)</td>
<td>2020년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2021년 (1)</td>
<td>2022년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2023년 (1)</td>
<td>2024년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2025년 (1)</td>
<td>2026년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2027년 (1)</td>
<td>2028년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2029년 (1)</td>
<td>2030년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2031년 (1)</td>
<td>2032년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2033년 (1)</td>
<td>2034년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2035년 (1)</td>
<td>2036년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2037년 (1)</td>
<td>2038년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2039년 (1)</td>
<td>2040년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2041년 (1)</td>
<td>2042년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2043년 (1)</td>
<td>2044년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2045년 (1)</td>
<td>2046년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2047년 (1)</td>
<td>2048년 (1)</td>
</tr>
<tr>
<td>올해의 시리즈 (군론)</td>
<td>2049년 (1)</td>
<td>2050년 (1)</td>
</tr>
</tbody>
</table>
著「源氏活花記」が刊行された。

（注3）享和三年（八〇三）の奥書には松生、国会本の前篇の序文には著者堂がある。序文の本文は伝本

による異同が多くあり、中之島本には著者堂の名は見られない。

（注4）中野昌一氏が提供された別の本にあるらしい（注1の著書、四一六頁）。

作者は自分の師匠として六条と篠田の二人を挙げているが、果たして実在的人物かどうか疑わしい。実際のところ

は、作者が最初に江戸にいたとき、折しも隆盛を誇っていた源氏流を読んだ。その名声にあやかり利用して、浪花で

心得之事、後篇の「早咲の梅、活方之事」である。各項目を例を説明するだけでなく、源氏物語の内容に関わる

記述は見当らない。

b、「源氏活花」

東海大学桐子文庫蔵（桃一〇一八七。国書総目録）未掲載。写本、一冊。外題・内題とも無し。巻頭に長い

序文があり、抄出して引用し、句読点を適宜付す。

「源氏活花」の巻の序

夫、生花の発端は千有余年前、護命尊師とといふありて、此道の跡をしたる名号有てけるを中興活花の師とは言ふなり。

四百年ばかりをへて後、明恵上人といふありて、此花を活花の祖とするなり。（略）又、護命より

夫より後、一百有余年をへて松月堂英尊と言ふ人、有。此人なで護命・明恵の二祖の流を汲て世にしられ、活
花にたのむると一緒に、是を古水とはいふも。また人々、寄つとひ、あまたの花を活ならして楽しむは、

昔、足利八世の君、慈照院、洛陽東山の別館に遊び給ひし時よりはましあたる趣とし間伝へるなり。我祖

師、楽宴斎先生は此跡をしたたひ、万のこと、あつちののみちにことわりにゐる、多なきをさとら、何く

れとひ、ものにわたり給へる。ことに源氏の言の葉のたへなるるさくを、おかしくおもひ立てて、此

式定らし源氏活花の巻と題するものなりけらし。

文化元年春、九月よき日。長谷川忠英序

右記にとる本は、楽宴斎が定めた『源氏活花の巻』と名付けた書に、弟子の長谷川忠英が文化九年（一八四三）

に序文を寄せたものである。千葉龍卜の名は見えず、他派の名（松月堂）が引かれているので源氏流以外か、資料

aのように龍卜以外の源氏流かもしれない。

右源氏活花式、天地人三巻内、天之巻六十条、及相伝候。若々他見他言、有之間敷候。猶

令伝授者也。

文化九年春五月吉旦。玉樹軒。忠英（印）

とあり、全三巻のうち第一巻の六十ケ条を文化九年に忠英が某人に授けたことが知られる。本書の内容は奥書に記

された通り六十条から成り。第一条の見出しは『花生置様之事』で、以下その解説が付く。源氏物語と関係するの

は、六十という数字ぐらいである。

東京大学総合図書館蔵（YB20/285）『国書総目録』によると孤本。写本、二冊。二冊とも外題はなく、

『源氏活花秘伝』c。
源氏流の伝書が、他流のに比べて非常に少ないのは、当流が廃退したからであろう。しかしながら始祖龍トが唱えた点、すなわち足利義政を祖とする東山流は、源氏物語を取り入れたことに絞り、華道史における源氏流の位置付けと役割を考える。義政を祖とする考えは他派にも利用され、その結果、東山流など多くの流派が生まれ、華道の隆盛に寄与したと言えよう。その中には江戸で活躍した龍トに対抗して、浪花花語の活け方を東山流などが模倣し、さらには現代の華人も試みており、その意味では源氏流が後世に残した功績は、非常に大きいのである。

1月野幸一氏『源氏流生花書解題』（源氏物語の受領資料、調査と発掘）、所収、文蔵草書院、平成九年。
2月の九月、著者に手記、文蔵草書院、明治四一年、所収。
3月の九月、版本と源氏流生花書解題』（文蔵草書院、明治四一年、所収）と、その写本（大阪府中之島図書館蔵）に改刻、著者に手記、文蔵草書院、明治四一年、所収。
4月の九月、版本と源氏流生花書解題』（文蔵草書院、明治四一年、所収）と、その写本（大阪府中之島図書館蔵）に改刻、著者に手記、文蔵草書院、明治四一年、所収。
5月の九月、版本と源氏流生花書解題』（文蔵草書院、明治四一年、所収）と、その写本（大阪府中之島図書館蔵）に改刻、著者に手記、文蔵草書院、明治四一年、所収。
6月の九月、版本と源氏流生花書解題』（文蔵草書院、明治四一年、所収）。
かれた「前得実齋一流」という署名である。二世得実齋の著書「拝入花薄精微」に「花道古書集成」5所収入には、

「小伝書自言」の成立は、文化三年（一八〇五）に八十二歳で没した一世が七十歳のとき、すなわち一七九七年であり、年代後半と推定される。

7、伊井春樹氏、源氏物語の伝説（昭和出版、昭和五年）など参照。

8、ただし奥書の末尾に「寛政六年写之」とあるが、寛政六年は徳川家を統治する年で、寛政五年は寛政五年である。

9、稲房子氏、源氏物語読本（中世源氏物語集）、中世文芸叢書、昭和四〇年、広島中世文芸研究会に翻刻されている。

10、稲房子氏、中世源氏物語読本、昭和五年に翻刻されている。

11、小稿「吉永文庫・源氏秘書聞書・解題・翻刻」（親和国文）三三、平成二〇年二月に全文を翻刻した。

12、伊井春樹氏、源氏物語読本（中世源氏物語集）、中世文芸叢書。

13、護命（生没七五〇）八三四年は法相宗の僧正。明恵（一七三三－八三三年）は華厳宗の僧侶にして歌人。

14、「国書総目録」では著者を「伊井春樹」で表している。小林賢成編「いけばな古今書籍一覧」（大正二三年、日本古文書会）によると、

15、小稿「前得実齋一流」は、『源氏物語』の注を伴うもので、伊井春樹氏の著書として、『源氏六帖・花形』及び『裏中之巻』（天保九年、写本一冊）と、『源氏五十四帖卷』（成

付記、末筆ながら、貴重書の閲覧・掲載を許可していただいた諸機関に、厚く御礼申し上げる。また翻刻は、岩
一、翻刻は原文のままを原則とし、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

1. 底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。
2. 句読点を付け、会話・心内語・手紙文などは一括った。
3. 明らかに誤写と思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。
4. 私に付けた振り漢字も、右側行間の（～）内に記した。なお古人が御幸・夢浮橋の巻に付けた（）は、翻刻では（）とした。
5. 虫損などにより読めない箇所は（）の記号にした。
6. 挿し絵に書き込まれた文章は、その巻の末尾に置いた。「絵」以下に記した。

二、影印は縮小して掲載した。
桐壷

桐壷のみかと

がねも

といきなきもとゆとに

長き代を

契るこころ

はむすひこ

桐壷

桐壷の更衣、御産の時、ひもおと遊ばして、安々と御誕生。

玉の様なる御若宮にて、光君と申して、ほととに十二才の元服

も過ぎて、葵の上と御婚礼ありしとの御事にて候はし。（桐壷）

更衣は、女官にて、御衣をあらためる役を云ふ也。是は、

桐壷と云ふ名にて、桐を生るなり。然れども、元来は、さに

てのもなし。桐に鳳凰と申して、聖代の御産をさして、桐壷と云ふ也。

は、御薬の花也。みすの花を略して、当世、かべにうしけ

て、絵に写して、桐の間といふ也。元来、右に記じへし。文

の心なり。みすの花、第一の習とする也。委しくは極意の巻

に有て、愛には略す。極祝儀也。
夕顔

ゆづみの君

夕顔

ゆづみの君

よりてこそそれかともみのめたさかれにほのくのみゆる花

のゆふかは

にでみやす所のかたへ御通ひの道に、夕顔の咲きみたれ

しを御拝にして、御車としめさせ玉ひ候へは、ふせ屋より、女

の、白き扇に歌をかきて、花を添へまいるらしき候に依り、浅か

らず御契りありし物語こそ、夕顔の巻にて候へかし

は、時節の花を身木にして、後より前へ、ひる顔か瓜

の類、白き花、よし。つるを前に生なる。ひあふげをし

らふべし。やうもの大事なり。
花の宴

これが

花の宴

いつもと露のやとりをわかぬ間に小さいかはらにかせ

かのふけ

桜の頃、御殿に御遊ありし時、若き女の声して、 SHR "おひるよ

にしろそのはなし"とたびたび花の宴の巻と申にて懐かし

扇を取ひた玉ひし、此形は桜也。応答に、ひあふきか、 쉽かか、あしかへ

はるし、扇の応答とふなり。

源氏流生花書について
若紫

手につめていたしかもみむらさきのねにかよびける野辺の若草

紫の上、十歳斗の頃、北山の僧都ともちろん、光君のもとへおわしめる時、手錐の雛、籠よりとりはなし、むかし

玉ぶ、君ことおしみありて、むかひ、養ひ玉びしを書

に白か黄かの花を一色さして、其下に、赤か紫かの色よき花

を一色、少しぎつむくようにに生べし。立のびたる笹は、鷗に

かたどり、中段の花は、僧にかたどり、下の色よき花は、紫

の上むつかる、いきはなり。
末摘花

光源氏

なつかしきいろともなしだににしのへし摘む花を栞に

末摘花と申は、ひたちの宮と申せし人の娘にてわたらせ玉

ひ候。君、十七歳の頃、ゆかしくおぼしきして、御契りあり

後、御歌に、

なつかしき色ともなしだににしのへし摘む花を栞に

とん

は、此姫宮のはな、高くしてあかきを、

末摘花の草花をさすべし。要するに、右歌のこゝろに寄すべし。
とくばしはぎき。千尋のそこのの処はうさぎ
おひつまもとしれのてににえん

若紫の上

はかりなき千尋のそこのみるふさのおひゆく末はわれの

葵

賀茂の葵祭に、源氏の君、紫の上と同じ車にせずして、御見
みそ見ん

賀茂の葵祭に、源氏の君、紫の上と同じ車にせずして、御見
みそ見ん

物ありし時、葵の上の車とみやす所の車と、たて所を争ひ、
みやす所の車、損じたる御うちありて、仲秋の頃、もの、
けとなり、葵の上の命、とり玉ひける事、恐しき物語にてお
こばして候かしく。

此形、葵武本、同し高年に生け、やがて応答べし。尤、前
へ、しあがの葵武枝、出し候は、車争なり。時節の花、何
にて未ものを同じ様にして生を第一とする。是を、たけくら
べと申て、外の花形にては嫌ふなり。此花、丈ケ競を第一
の習とするなり。前へ出すやかの葉は、車の形と見、長柄
と見るなり。両方、同じ木花、同じ萎花にて仕立なるなり。
小納言

神垣はしるしの柵もなきものをいかにかへて折れるかきそ

柵の巻は、六条のみやす所の御殿、斎宮といふに成て、伊勢へ下り玉ふに、光君、御名残をしむひし事、書たるに

此形は、柵を身木にして、時節の花を生じ、時節の花、二色かよし。一色高く、一色低く、身木のうらよりさし、しの

心に生くべし。杜若ならば、白紫を遺ふべし。
臤花

うためみしきのおりよりもけふは馬度にしかたにか

「ね、厳かなことかな。」

「ええ。」

絵合

「きよりの介女房」

うためみしきのおりよりもけふは馬度にしかたにか

「ね、厳かなことかな。」

「ええ。」

絵合

「きよりの介女房」

うためみしきのおりよりもけふは馬度にしかたにか

弥生の頃、御門に絵合ありし時、光君・需磨にて書き玉しぶを、おぞくも見せ玉しぶを、うらみ玉しぶ歌など、おはしけしそうし次第に生じし時、模様を合べ事を。

此形木花ならば両方共花花、草花ならば草花を生すべし。

二重切に生ける時は、上下同様に生べし。絵合は、模様を合べ事を。

絵の上段

「絵の上段」 ネモト八面二五本二見ユルヨーツカフ、両方同様二六本

絵の中段

「絵の中段」 此葉八、ミエカクレ、

絵の下段

「絵の下段」 絵合ハモヨーテ合セルコト故、両方同様二六本

生ユルナレモ、六本二見エス模、後二見エカクレニ

本ッカペ。
松風
六条五葉を
身をかへてひとりかえれる古さとに
うしろさかを吹く
松風

松風の巻は、明石にて相ならず玉ひし女、ひめ君をもふけ、
三年へたうて、京ちかき大井といふ所に住む。川をみす
く、松の嵐に、淋しく思ひて、源氏のかたみに残し玉ひし
琴を弾じ玉ひたる事を、かきたるにて候かしく。
此形、曲ひ松なり。薄は後につかひ、杜若は前につかへ
し。此薄の遺ひ方、かけの薄とて、習也。前のたへは、女郎
花、又は桔梗にても仕立ちり。模模もなり。大事。
蓬生

夕顔の君

源氏、廿八歳の四月に、須磨より御のぼり有りて、花散里へ行き玉ふ折仮し、末摘花の事、おもひやりて、尋ね玉ふ。庭に、よもきしきより、露ふかく見えければ、打はらはせて、入り玉ふ。これより、よもきふの巻と申にて候かし。此形蓬を身木にして、時節の珍花を間へ摘ませて、絹薄か山がやにて、さしまじゑて生べし。
濡標

数々でかはる事あひりに

ちやつをつけしおもひを

濡標

とおの式部

数ならでなにのは事もかひなきになにに身をつくしもひ

この形

若松二本に

時節の花

赤白二色

生べし。もし

無き時は、水草式種そへ。生べし。
入日さす峯にたなびくう香はものもふ袖に色やまか

薄雲

なつの御かた

入日さすの丘の香はものもふ袖に色やまか

薄雲の女院と申は、藤壷の御事にて、光君の御名をよそへ

にて、かやく日の宮とも申候。此宮へ、源氏、わりなくもし

のびて、若宮、出来させ玉ひ候。十一才にて御位につき玉ふ

まで、父御門の御子とみ、人さへやおもひ参らせ候かし

く。

如く生ける也。陽花は入日、すいきは、たなびく雲と見るべ

し。
乙 女
かさは ひぬらし
天の 袖
ふるさ
世 と とも ひの
生 り
れえ

毎年 の 御 嘉例 で と
乙 女 の 舞 姫
に
きよ の 姫
dまし り つ
と
めに
cれみつ の 娘 の 舞
おもし
ろ
く
舞
ふかを
tこと
かんし
給
ひ
事
を
かき
たる
文
。面
白
く
お
へ
ま
いal
せ
候
か
し
く

此 形
大 葉
に
小 菊
、
鳥かぶ と の 類
、
や
さ
し
き
も
の
よ
し
、
大
葉
は
、
乙 女 の 舞 の 袖
、
や
さ
し
花
は
、
姫
宮
と
見
る
。生
様
、
れ
い
し
の
花
形
と
同
じ
。
恋わせる身はそれぞれれと玉かつついかなるせちをつてねぬれん

恋わせる光をあらしめよとむたれ

玉葛の事は、夕顏の上の娘にて、つくし方にありしに、おひし人にめくりにて、京へのほり玉ひ、はつせまうて、右近といはなくして光をあらしめよとむたれ。

生花をあらしめよとむたれの品を生もしもる

此形、木草花とも、時節の珍花を生じる也。此去の心の如く、いかなるすちを尋ねきぬれんの心にて、木草の縁を頼み来りてそたけ心に生じる。それが故、身木、土へおぼひかくらしして生じる。懸想、生花に身木をおぼはせて生じるは、この心なり。
下に記載されている通り

……（続き）
花書

胡蝶

かたちのきみ

蝶の舞う降らぬ庭の小桝

とて大夜団扇ささみの

花をかさりし八人の女伴ふるあい

となりし人

花園の中でふるささくした草に秋まじ虫はとうと見るら

蝶の舞、古の院、宮、後などの季の御詠詠とて、大

般若経をよみ玉ふ法事の頃、花をかさりし八人の乙女。舞ふ

事あり、まいらせ候。秋このむ中宮は、六条の院にて行はせ

る。紫の上へ花まいらさせられる。歌。紫の上にておはしま

し候かし

此形は、一種一色の花をは。得の花形の如く生じ、しや

かか大葉を応答べし。前に時節の花、色々、前へふちへ出し、

かか大葉を応答べし。前に時節の花、色々、前へふちへ出し、

真の応答のことくに生るなり。尤、前の花は、元来、八色生

るなれとも、仕立かたし。
莹

竈（ちが）

声はせても身をのみこかす蛍とそいふよりまきるおもひな

莹の巻は、玉かたちきの歴を御かたち、すくねさせおわせし

莹はあしたの君はすみましめをしゅせお

きよしこばる君はすみましめをしゅせお

ありがたなことえもすきゆうせさん

はしごして玉をしゅせお

さるし

さるし

さるし

さるし

さるし
風分、六のきみ

秋はきむら雲まよふゆふへにわする間なくわすら

風さはきむら雲まよふゆふへにわする間なくわすら

れぬ君

野分

六のきみ

風さはきむら雲まよふゆふへにわする間なくわすら

紙送りをせば、花もをし、御いとこと、雲井のかたと申方へ、文して

此形、曲松に切留めのかや、時節の花、応答べし。大風の

吹く体に生べし。松、一本にもいたし、すきもよし。
御幸
べんのきみ
をしはし山みゆきつもれ
の松原にけふ斗りなるあらやな
のうけたると

頃は二月に、みかと、
大原野に幸ありしに、源氏の御
のいみあきて御供なく、
ぼいなさとし、
御歌を下されしを、
源氏「おしはし山御幸
深雪」つもれる」と御返しありしを、
御幸の巻と甲事に候かし

此形、身木、若松に、
時節の木花、応答べし。とめは、
あやしの壇の花は咲き、ふちはかま

おなし野の露にやめ、ふちはかま

とはかり

玉かつらの内侍、いまだ、ひげくろのもとへ御移りなさき時、

夕霧の大将、蘭の花の見事なるを折、我には福を

すの外より、さしいたしにある歌にてありまらせ候。玉か

すと夕霧の大将、まことの兄弟にてはなく候などといふ

も、ふちはかまの事故、此巻の名といたしたる事にて候か

く。

此形、ふちはかまを身木にして、糸薄、時節の花を応答で、

これは、二株に生る。横へ二株にては無し。後へ二株なり。

応答は、両身木へ、同じ様に同じ物をつかふべし。尤、後

身木は右に応答、前の身木には左に応答べし。場所を違ふて

応答べし。
真木柱
あかしの中宮
いまはとて宿かれぬともなれきつるまきの柱よ我を忘る

愛に事まいらせし、ひけくるの北の方ニものへけ付えて
わせしゆへ、玉かづらを北の方になし玉ひて、すて候へ。

此形、長春を身木にする。枯大葉、応答なり。是は、うら
み述懐の心ゆえ、いばらもの、あざみの類をいけるなり。諸
の花入を、柱に釘をうち掛る事は、此卷より起るなり。
梅枝

花の香は散にし枝にとまらねとつつらむ袖にあさくし

花を放るとき

花の香は散にし枝にとまらねとつつらむ袖にあさくし

梅枝

左大臣

花の香は散にし枝にとまらねとつつらむ袖にあさくし

花の香は散にし枝にとまらねとつつらむ袖にあさくし

梅枝

左大臣

正月の頃、源氏、たきものをあはせ玉ひし時、紫の上、朝

の音佇み、梅か枝に、「あさくしほめや」の歌をそえていた玉ひ

し立て、「すくれてやさしくも」とははんし玉ひしゆゑ、梅か

枝の巻ときこえまされ區候かしく。

此形、身木、白梅に限り中候。応答は、大葉ものか、しや

か、外のあらじはなし。
藤裹葉

春日さす藤のうら葉のうらとけて君おもはいわれた

まさささをくわむぎみちこもん

君しちかくわむぎみちこもん

春日さす藤のうら葉のうらとけて君おもはいわれた

藤裹葉

むつほの君

夕霧の君

雲井のかりの姫宮をおもひそめ玉ひしほ、御父

はしめはゆるし玉はす、後にゆるし候はんとて、東の中将を

むかひ、御かわらけの折から、「藤のうら葉のうちとけて」

とありしを、此巻の名に寄せしにておわしまし候かしく

此形、藤はばかりを生る也。陰陽の葉、立葉、習也。外の応

答もなじ。是故、つねつね床に生るに、応答をそれく

たすなり。藤斗りは、ゆるしなくして、生る事、無用。
若菜

小松原するのよはひにひかれてや

面

若菜

源氏

小松原するのよはひにひかれてや

面

若菜

源氏

若菜

若菜

源氏
春の雪に、源氏のもとて、御幸あれまいか。若菜の下の巻と見えまいか、はっかしを、柏木のあらも参り玉ひしに、女三の宮のかはせし猫を、しかぬありまいか。若菜は、たとし、まりし花びらが落ちて下、下、下。此枝、身木、手まわり柳、定法なり。手かかの系と申で、柳の系をし申なり。右の巻の心なり。猫の綱なり。それを、手かかの系と申で、花を生じては、せひ、柳か、花の無きか、花入の口よりたらし申事、願する也。祝儀なり。此巻、伝授習事なり。
柏

いまはとてもへんけふりもむすばれたへぬおもひの名をや残らん。

不は血をきえてやしながらうき事を」との歌、柏木りょり、

いまはとてもへんけふりもむすばれたへぬおもひの名をや残らん。

不は血をきえてやしながらうき事を」との歌、柏木りょり、

今はの時におくりし歌の返しにて候、衛門におもひわらひ、

今はの時におくりし歌の返しにて候、衛門におもひわらひ、

候かしし。

此かた、大葉に、時節の花を、時雨笠の形のよぶに、大葉

の下にいけるなり。是は、無祝儀なり。
横笛のしらへはことにかわらぬをむなしくなりしにこそ

柏木の衛門の妻、おちはの宮は、衛門に遠く御別ありし御
心のほどの、あはれにおはなし候。御節、仲秋の月夜、夕霧
の大将、御尋ありしに、衛門、今はの時迄、持玉ひし横笛を
と出し、大将にすすめ玉ひ候へは、しらべ玉ひて、あはれ
の夢の切へて、横笛の巻を申にてこそ候へかしす。

此形、身玉、竹なり。竹武本、節上一寸三分程、置切留
其ふの所に、枝よりの葉、七、八枚置べし。図のく、応
答に草はならず。花、枝は、木草へ通用物を生べし。前へ、
やか三本、花、花人の口へへて、たらすべし。是を、お
び葉とて、定の習なり。此形は、一重の花入に定らるなり。

この花、草類なり。近所云フハ、草ニモルハト云フハ、ウモ
ルレハ、音ノ出スト云フ嫌フ也。
鈴虫
雲井のかかりの君
こいろもて草のやとりをいとへともなはずすへむしの声つ

女三の宮、御花をおろし玉ひて、浮き世の無常をおほし

五夜の月に、鈴虫の鳴く音を聞。むかしといままの心をこめ

此形は、草花斗り賞罰するなり。上の山がや、葉遺ひの

絵上から時計回りに
山薔。白菊。紫桜桟。向角。赤

五夜の月と見し

干翁。摺子。薄。女郎花。
夕霧

山里のあはれをそふる夕霧に立出ぬかたもなきこゝろし

此形、大葉を横へやり、其下へ糸薄つかふべし。薄なき時
は、冬枯のかやにてすべし。花は、時節の花、生くべし。大
葉、すゝき、霧の心にとるなり。
御法

玉かつら

たえぬべきみのりなからはたのまるよよいにとむすぶ中

源氏、五十二才の頃、紫の上、御心しれいならす、御いのりを

の契りを

源氏、五十二才の頃、紫の上、御心しれいならす、御いのりを

候により、みのりの巻と申にて候かしく。

此形、若松に老母草、小菊留梅、身木は竹にて仕立つる

なり。
幻

ひげ黒の大枡

大空をかよふまぼろしゆめにたに見えるかの玉の行方つ

世の中は老少不定のならび、紫の上、浮世を遠く去り玉ひ候へは、光君の御なげき、大師ならす、ゆめに見つ、つつ

藤も写し、内に形あり。他をまと、もし物語性を博す

此形、無常の花なり。蓮か、けしか、鬼角もよりき花を生る

ありて、多くは無常花に成り易きなり。
句句

おぼつかぬれ、はおにうもうほく

句句

おぼつかぬれ、はおにうもうほく

句句

おぼつかぬれ、はおにうもうほく

句句

おぼつかぬれ、はおにうもうほく

句句

おぼつかぬれ、はおにうもうほく
竹川

竹川のはし出し一ふしにふかき心の底にしりきや

竹川の名は、の歌の言葉を名付たるにて候。

精よし写し草の上よりふし迄、一寸と、又一本は一寸五分とに、小口切

永和三

大伴ひめ

竹川のはし出し一ふしにふかき心の底にしりきや
橋姫

柏木の衛門

はし姫の心をくみてたかせさつ桟のしつつくに袖そぬれぬ

宇治の里に、八の宮にて、光源氏の御おち君、おはしまし候。此宮、めて事の道にも、くらからすおはしまし候、はし姫の

ものならひに御通ひなされ候。姫宮一人おはしまし候に、

おくり玉ひし「高瀬さす」の歌、心深き事えど、お

はしまし候。此卷を、はし姫と申候。是より中の段を、字治

拾帖と申まらいさせ候かし。此形、すあいものを生け、大葉ものを生木として生る也。すあいものあるときなら、其木の花を下に応答べし。花な

き時は、卵の花を応答ふ、大葉か熊笹か方、はれん、柏、

しかも、しやかの内、すあいは、梅か桃の類なり。又、枯に

一絵、客位へ生出す。向角へ葉を流す。
椎本、女三のみや

立よらぬかけとたのみしもひかもとむなしき床になり

椎か本の巻は、宇治の宮、かほる大将に、なからん跡をた

のみおき玉ひ、ものしつかなる山寺にこもり念仏して、むな

しくなり玉ひたる事を書きたるにてはしまし候かし而已。

此形、身は、生木ならは生木、生草ならは生草にて、それ

へ、かれものか干物かを添えていけるなり。其下に、草花を

応答べし。無常の花なり。
総角

小じぞう

あげまきになかきちきりをむすびこめおなしところによ

りもあはな

宇治の宮の御拝とて、姫宮たちとかほる大将と共に、仏事
をいとなみ玉ひける。香つくゑのすみにたるるめにて候かし

玉ひしを、巻の名といたたる事にて候かし

此形、身木、尾花なり。松に、時節の草花、応答べし。尾

花は、機のすみにたるる四の緒なり。尾花、四本生る善れ

とも、四は嫌ふ故、三本活るなり。尾花なき時は、其心持を

以て、松に時節の花をそへ、生るなり。
早蕨
おちばのの宮

此春はたれにか見せたかなぎ人のかたみにつめる傾のさわらび

宇治の宮の御娘、中の君は、妹君にもおくれ玉ひし春の頃、
ひしりの方より、さわらびを送り来りけるを御覧じて、一心
の春はたれにか見せたかなぎ人の御歌こそ、御いったはしきものが
たりにてはしまし候かし、

此形、わらびの穂か、せんまいの穂か、一色を、かろく生
る。山かやにしのぶ草、おもに生るなり。
やとり木とおもひ出しのこのの
たびねもいかに
かしらも

此形は、陰花を陽座へ直して生るにて、宿り木なり。

身木と花人の間へはさみて、前へ出して応答て、身木
は右座に出る心になるなり。然に、応答ものも陽座へ

はててん事造、なけきおほしめして、寺となし、弁の君
おはしにし玉ふ事を、やとり木の巻申に

て候かしく。
手習
まきはしらの君
も

浮船の君、よいと春はし、犬野の尼と申人、はつ瀬にて
夢のつけありしに、めくりあひて、庵に入おき、手習なさ
せを、巻の名をいたしたりて候。此尼の娘、はかなく
りしのち、賀の少将といふ人、浮船に乗るむれ候ひしを、も
のうおもひ、かみをつりたるとの事を得、書たる事にて候
かしく。

此形、時節の花、身手にして、大葉、応答べし。此大葉、
と見るべし、大葉もよも一枚、傾って、其外のもようは
見合せ、巧者に遣ふべし。
夢の浮橋
あつまやの君

このりのしと尋ぬ道をしるへにておもはぬ
山にふみま

写者日、「し」とは、ひとみのアラザルカ

手習の君、小野に居給ふを、かほる、聞つたへ、ひとたちの

守か子をつかひとして、御文つかはしほふ。歌に、「のりの

しと尋る道をしるへにて」とのみ玉し事、盛者必童のおも

んきなれは、夢の浮橋と名づけたる事と、承はりまいらせ

嫡つ

此形、残花をもとにして、前に珍花をいけるなり。花かた、

黒みてつよくと心得べし。

中央、青賀の卓、漢土の小花、卓下に生げ玉ふ。此花は、源氏の終の花、

別而、心を用玉ぶ事なれべし。